様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７８０４２５

研究課題名（和文）カナダ・オンタリオ州におけるリテラシーを中心とした「学力」（コンピテンシー）研究

研究課題名（英文）The Research About Competency in Ontario School, Canada

研究代表者
森本　洋介（Morimoto, Yosuke）

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：２０６３３６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではカナダ・オンタリオ州における「学力」（コンピテンシー）がリテラシーと数的思考力を中心にしたものであることを明らかにした。特にリテラシーは「広義の意味において、活字及び視覚テクストを読み書きすることを通じた意味の生成である。言語やリテラシーは生徒が他人とコミュニケーションを行う社会文化的な文脈（ジェンダー、人種、社会階層、年齢などにおけるアイデンティティや権力関係を含む）において発生する社会的実践である」と定義され、教育現場では実際に子どもたちが目にするような教材を分析・制作することでその育成が目指されている。さらに州統一テストでその学力が最低限獲得されたかを公正に評価される。

研究成果の概要（英文）：Through this research, I clarify the competency in Ontario is that literacy and numeracy are centered in the ability. In particular, "literacy" means "broadly in current research and for the OSSLT as construction of meaning through reading and writing a range of print and visual texts. Language and literacy are viewed as social practices that take place in and are influenced by the social and cultural contexts (including gender, race, class, age and other identities and power relationships) in which students interact with others" (EQAO (2016), Framework Ontario Secondary School Literacy Test. p. 14). This literacy is taught in schools by the education that students analyze and create media text that they usually see, read and play. Teaching materials exist not only in schools but also students' ordinary lives. Students will be evaluated their competency through Ontario Secondary School Literacy Test (OSSLT). The scoring process about OSSLT tries to keep validity and transparency.

研究分野：教育方法学

キーワード：コンピテンシー　標準学力テスト　メディア・リテラシー　カナダ・オンタリオ州

１．研究開始当初の背景

国立教育政策研究所の松尾によれば、「コンピテンシー」＝「知識だけではなく、スキル、さらに態度を含んだ人間の全体的な資質・能力」（松尾知明、「コンピテンシーに基づく教育課程改革の国際比較」日本カリキュラム学会第 24 回大会発表資料、2013 年７月８日）を指し、世界的には PISA に代表されるような OECD の DeSeCo プロジェクトにおける「キー・コンピテンシー（主要能力）」の考え方と、メルボルン大学がマイクロソフトなどと共同で行っている「21 世紀型スキル効果測定プロジェクト（Assessment and Teaching of 21st Century Skills、以下 ATC21S）」の考え方があるとされている。DeSeCo プログラムは 1997 年末にスタートし、2003 年に最終報告を公表した。これは PISA 調査の概念枠組みの基本となっている。また ATC21S はその前身となるプロジェクトが 1991 年に始まり、2002 年から現在のプロジェクトに発展した。これら２つのコンピテンシーの枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え行動する能力であり、目前の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはまることができる力だけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え行動する力が含まれている。

日本では PISA の影響もあり、とりわけ OECD の「キー・コンピテンシー」が、「PISA 型学力」と称して注目を集めるようになった。全国学力・学習状況調査の B 問題は、「PISA 型学力」を今後日本でも育成していこうとする方針を明示したという解釈もできる。しかし八田によれば PISA で測ろうとしているコンピテンシーは、出題された連続型（文章など）・非連続型（図形やグラフなど）テキストに対して、それらから読み取れることと解答者が所有している知識を根拠に自分なりの解答をすればよいのに対し、B 問題では出題者の意図を解答者が読み取り、いかに出題者の意図を正確に表現できるのかが要求されている。すなわち、「自分の考え」の想定が PISA と「PISA 型」（＝B 問題）では異なることが示されている（八田、2008）。これは自分の意見を根拠を持っていれば自由に表現できるということと、著者の意見を自分の意見のようにして代弁しているにすぎないという大きな違いがある。そのため「PISA 型学力」が今後の日本の子どもを世界をリードする人材育成に寄与するかどうか疑問である。

申請者はメディア情報リテラシー（以下 MIL）に関する研究を行ってきたが、一般的な学力観との整合性や関係性には言及できていなかった。そこで、オンタリオ州の中等教育修了要件であり、オンタリオ州が子どもに達成させるべきコンピテンシーとして EQAO が実施している「中等教育リテラシーテスト（以下 OSSLT）」に焦点を当てることで、PISA の「読解力」等の問題との内容比較も可能となり、オンタリオ州の「学力」（コンピテンシー）の特徴を明らかにすることができると考えられる。

八田幸恵「国語の学力と読解リテラシー—「自分の考え」とは何か—」田中耕治編著『新しい学力テストを読み解く：PISA/TIMSS/全国学力・学習状況調査/教育課程実施状況調査の分析とその課題』日本標準、2008、41-65 頁

２．研究の目的

上述した背景を基に、本研究では、オンタリオ州教育省と EQAO が想定する「学力」（コンピテンシー）について、何を想定し、実践においてそれをどのように子どもに達成させようとし、教員や EQAO はその達成をどのように評価しているのかを、PISA や ATC21S、MIL といった世界的なコンピテンシーと関連づけて明らかにする。その際、具体的に OSSLT に焦点を当てることにより、国際的なコンピテンシーにおけるリテラシ

ーテストとの比較を可能とし、オンタリオ州が世界でどのような特徴を有しているのかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究は、３つの段階に分けて行う。第一段階は、国際的なコンピテンシーの枠組みについて分析する段階である。PISA 調査が実施しているコンピテンシーの枠組みは、「読解力」、「数学的リテラシー」、「科学的リテラシー」、「問題解決能力」の４つに基本的に分類されているが、あくまでキー・コンピテンシーのうち「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力（個人と社会との相互関係）」のうち「道具を作用的に用いる」能力の一部を測定可能な程度にまで具体化したものにすぎない（松下佳代「〈新しい能力〉概念と教育」松下佳代編著『〈新しい能力〉は教育を変えるか―学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房、2010 年、１-42 頁）。

第二段階は、第一段階で分析したコンピテンシーの枠組みを踏まえ、州教育省と EQAO の「学力」と、具体例としての OSSLT について調査する。その際、EQAO や州教育省が公表している情報（ホームページや年次報告書、各種レポート等）の内容を参考にするとともに、関連している文献調査を行う。しかし、それら媒体で知ることのできる内容は限られており、コンピテンシーの開発に当たって何を参考にしたのか、実際の学校現場での受け止められ方、教育実践などは現地調査を行わないと理解できないことから、現地での調査を行う。

第三段階は、第二段階までで得られた知見を踏まえ、日本において公平・公正な社会を築くためのコンピテンシーと、そのコンピテンシーを獲得するための教育方法、評価方法について提案する。最終的に研究結果をまとめた報告書を作成する

４．研究成果

（１）コンピテンシー概念について

「コンピテンシー（資質・能力）」とは、単なる知識や技能ではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応したり、未知の課題に対して自分なりに解決策を見出したりしようとする総合的な能力のことである。現時点で所有している知識・技能だけでなく、現時点でわからない未知の課題に対して、リソースを駆使（例えばネットで調べる、有識者にインタビューする、など）して課題を解決しようとする意欲・態度も能力として含まれる。

キー・コンピテンシーの枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え行動する能力であり、目前の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはめることができる力だけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え行動する力が含まれるとされている。つまり、読み書き計算能力は既にあることが前提で、それに加えてどのようなコンピテンシーが必要か、という考え方に立っている（立田、2014）。日本では社会科や道徳、特別活動等で既に実践されてきた内容が含まれており、確かに企業人や起業人として必要な能力に偏っているわけではないことがわかる。これは恐らく、近年の企業において企業の社会的責任（CSR）が意識されていることであるとか、企業を運営するうえでの社内の人間関係に影響する男女意識、企業にとってはある意味不可欠な政治との関係づくり、といった諸要因が影響していることも推測可能である。

結局、21 世紀型スキルが強調する優秀な労働力という点にのみ目が向いてしまえば、現在問題になっている非正規雇用の問題や、家庭の経済格差の問題、子ども貧困問題等の福祉的な問題が、能力主義の一言で解決されることになりかねない。すなわち、「そのよう

な境遇にあるのはあなたの能力が職場で要求されている水準に達していないからだ」と。また、21 世紀型スキルが国際競争で勝ち抜くための能力であるというレッテルを貼られてしまい、学校教育で最優先にすべきと認識されてしまえば、それ以外の問題、例えば日本への移民や難民とどのように共生していくかといった問題や、原発問題など、倫理的、道徳的な問題とどのように向き合うかが学校教育において疎かにされる可能性も否定できない。知識基盤社会における優秀な労働力の育成という考え方も確かに重要である。よって、その領域の能力と共存する形でこれらの問題に向き合う能力の育成も必要だろう。「あれもこれも」という教育は得てして総花的になりがちであるが、21 世紀型スキルやキー・コンピテンシーの求める能力を手段と目的に適切に整理することで、共存を図ることができるのではないだろうか。

（２）オンタリオ州における「学力」

1996 年 6 月 27 日に公立学校に通うすべての子どもは州統一の学力調査に加わる必要があるとする法律が制定され、学力調査の作成、実施、結果の分析などを行う機関として「教育の質とアカウンタビリティに関するオフィス（Education Quality and Accountability Office: EQAO）」が設立された。EQAO は第３・６学年の読み・書き・算数テスト、第９学年の数学テスト（以上は学力調査としてのテスト）、第 10 学年の中等教育リテラシーテスト（Ontario Secondary School Literacy Test: OSSLT。中等教育修了要件の１つ）といった、州統一のハイステークスなテストを 1999 年以降段階的に実施している。2002 年以降はこれらのテストを毎年実施し、採点および結果の公表、調査結果の分析と報告を行っている。各学校及び各教育委員会は EQAO 報告書及び自らの学校や管轄学区の結果を考慮して、改善のための行動計画を作成することが求められている。EQAO の実施するテストの結果は EQAO のサイトで教育委員会・学校別の結果と報告書を公開している。なお、OSSLT については合格率を示し、その他のテストについては達成レベル別の結果および州の最低基準以上の子どもの割合を示している。

OSSLT における「リテラシー」の定義は「近年の研究を基に、OSSLT ではリテラシーを次のように定義する。リテラシーは広義の意味において、活字及び視覚テクストを読み書きすることを通じた意味の生成である。言語やリテラシーは生徒が他人とコミュニケーションを行う社会文化的な文脈（ジェンダー、人種、社会階層、年齢などにおけるアイデンティティや権力関係を含む）において発生する社会的実践であるとみなされる。」（EQAO, 2016, p. 14）となっており、単なる読み書きのスキルを超えた文化文脈の読解・表現まで含むものである。このようなリテラシーの１つとしてメディア・リテラシーの教育がオンタリオ州では実施されている。メディア・リテラシーで習得すべき子どものコミュニケーションスキルは、自分たちが様々なメディアを通して受け取るメッセージを批判的に解釈する能力と同時に、自分の考えを効果的に伝えられるようにメディアを使う能力も含む。

オンタリオ州は学校における子どもの評価について、特に王立委員会報告書が出された時期に多くの議論がなされたことや、カナダの中でも特に多様な人種・民族・文化の人々が居住する地域であることから、公平・公正で透明性のある評価のあり方が求められてきた（森本、2009）。これは教員がどのような評価能力を持たなければならないのか、という議論でもある。本報告書で扱ってきたオンタリオ州の学力テストの採点の方法や、教員養成プログラムのあり方は、オンタリオ州の「学力」に対する考え方を浮き彫

りにしているのではないだろうか。

（３）日本への示唆

日本の 21 世紀型スキルに関する議論では ATC21S やキー・コンピテンシーで触れられていた「シチズンシップ」に関しては何一つ言及がないことが、日本の PISA に対する認識を表しているように思われる。先述した「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」の座長を務めた安彦は、コンピテンシー・ベースという機能面にだけ注意がいってしまい、それが人格の形成という人間本来の生きる意味に目が向けられていないことに警鐘を鳴らしている（安彦、2014）。また石井（2015）も「知識経済を勝ち抜く『グローバル人材』をめざすのか、経済成長がもたらす社会問題や環境問題などに『自分ごと』として取り組む『地球市民』をめざすのかによって、資質・能力やコンピテンシーの中身が大きく異なってくる点には注意が必要です。コンピテンシー・ベースのカリキュラムを構想する際には、こうした矛盾する社会増や人間像の間で、そのような方向性をめざすのか、そうした価値的な問いと向き合うことが求められます」（18 頁）と、優秀な労働力とシチズンシップの両面に目を向けたうえで、どのような方向性を目指すのかを考えることが重要であると述べている。なかなかこのような議論が浮上してこないのは、日本の文脈では従来の学習指導要領と対比して、21 世紀型スキルをこれまでのコンテンツ・ベース、教科内容中心の教育と矛盾しない形でどのように導入するかということに議論の方向が行ってしまったことが原因なのではないだろうか。

参考・引用文献

・安彦忠彦『「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり』図書文化、2014
・石井英真『今求められる学力と学びとは：コンピテンシー・ベースの光と影』日本標準ブックレット、2015
・立田慶裕『キー・コンピテンシーの実践：学び続ける教師のために』明石書店、2014
・森本洋介（2009）「カナダ・オンタリオ州における学習者の評価方法に関する考察：王立委員会報告書『学ぶことを好きになるために』を手掛かりに」『教育目標・評価学会紀要』第 19 号、47-56 頁
・ EQAO (2016), Framework Ontario Secondary School Literacy Test. http://www.eqao.com/en/assessments/OSSLT/assessment-docs/framework-osslt.pdf　2016 年 6 月 18 日確認

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０　件）

〔学会発表〕（計　１０　件）

①森本洋介「カナダ・オンタリオ州におけるメディアリテラシー教師の初期段階の養成：カリキュラムと教材を中心に」日本教育工学会第 33 回大会、島根大学、2017 年 9 月 18 日

②森本洋介「カナダ・オンタリオ州の学力テストとスタンダードをめぐる教育政策」日本比較教育学会第 53 回大会ラウンドテーブル 4「学力テストとスタンダードを軸とする教育ガバナンス構造の実態」、東京大学、2017 年 6 月 23 日

③森本洋介「オンタリオ州の学力テストをめぐる動向」カナダ教育学会第 49 回研究会、筑波大学東京サテライトキャンパス、2017 年 6 月 11 日

④森本洋介「ソーシャルメディア時代の「友人」とは？」日本教育工学会 SIG-08「メディア・リテラシー、メディア教育」第６回研究会・カナダ（オンタリオ州）におけるリテラシーを中心とした「学力」（コンピテンシー）研究会、弘前大学、2017 年 3

月 18 日

⑤森本洋介「カナダのローカル・テスト：オンタリオ州を中心に」第２回「テスト・ガバナンス／ポリテックス研究会」KKR はまゆう、2016 年 11 月３日

⑥森本洋介「メディア・リテラシー教育の布置関係構築への試み：歴史的・国際的視点から」日本教育工学会第 32 回大会、大阪大学、2016 年９月 18 日

⑦森本洋介「カナダ・オンタリオ州における州統一学力テストの実際：「効果のある学校」の観察と関係者への聞き取りから」日本比較教育学会第 52 回大会、大阪大学、2016 年 6 月 25 日

⑧森本洋介「1990 年代以降のカナダ・オンタリオ州における学力保障政策とその背景」日本カリキュラム学会第 26 回大会、昭和女子大学、2015 年 7 月 4 日

⑨森本洋介「求められる学力と学力保障のための実践—21 世紀型スキル、メディア・リテラシー 教育の視点もふまえて—」オセアニア教育学会・カナダ教育学会共催研究大会（兼カナダ教育学会第 44 回研究会）テーマ研究、桜美林大学、2014 年 11 月 24 日

⑩森本洋介「カナダ・オンタリオ州における州統一学力テストをめぐる動向：中等教育リテラシーテスト(OSSLT)を中心に」日本比較教育学会第 50 回大会、名古屋大学、2014 年 7 月 13 日

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

①森本洋介、カナダ・オンタリオ州におけるリテラシーを中心とした「学力」（コンピテンシー）研究会、カナダ・オンタリオ州におけるリテラシーを中心とした「学力」（コンピテンシー）研究　平成 26-29（2014-2017）年度　日本学術振興会科学研究費補助金　若手研究（B）（課題番号 26780425）研究成果最終報告書、2018、65

②森本洋介、カナダ・オンタリオ州におけるリテラシーを中心とした「学力」（コンピテンシー）研究会、カナダ・オンタリオ州におけるリテラシーを中心とした「学力」（コンピテンシー）研究　平成 26-29（2014-2017）年度　日本学術振興会科学研究費補助金　若手研究（B）（課題番号 26780425）研究成果中間報告書、2016、50

６．研究組織

(1)研究代表者
森本洋介（MORIMOTO, Yosuke）
弘前大学・教育学部・講師
研究者番号：20633613

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）